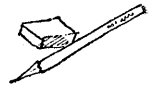


私の幼児教育論



玉井 収 介

幼児教育論といっても幼児だけ特別の「論」があるとは思えない。教育する内容や方法においては違いがあるにしても、土台となる方針は変わらないと思う。

最近登校拒否の子が増えてきた。わたくしは、毎年その親のグループ・カウンセリングを試みている。子どもには接触しない、親とだけ面接する。それは、親が変わらなければ子どもは変わらない、親が変われば子どもは変わる、ということを明確にするためである。

その接触を通じて感ずることの第一は、親達が、子どもを大切に

に育てる、ということを取り違えているということである。

大切に育てるといいことはいいことだ。しかし、それは、子どもが自分で身につけなければならないことを代ってやってやる、ということではないはずである。

それを混同している親が多い。だから子どもは、親がいなければ何もできない子に育っていく。

極端な例になると、小学校の一年生で、毎日親が付添っていき、机の間に座っている。先生が子どもの名前を呼ぶと、子どもは黙って母親の顔をみる。母親が代ってハイイと返事する。

この母親はこの人なりに、そうすればやがて、この子は自分なりの返事をするようになるかと期待しているのかもしれない。

しかし多くの場合、そうはいかない。子どもはますます依存的な子になっていく。

○

登校拒否といわれる子どものことは、昭和三十年代の半ばから報告されるようになった。子ども自身の知能にも身体にも病気も欠陥もなく、親も教育に熱心であり、——つまり、登校できなくなるような理由が外からはないように思われるのに——登校できない子どもである。

しかも、非行がかつた子どものサボリ、怠学というのとも違う。

こういう子どもは昔はいなかったであろう。この親のグループカウンセリングを始めてから五年になる。ある年は二グループであった。もう一〇〇人に近くなるであろう。

前述の例は極端にしても、メカニズムはそれに近いのが多い。たとえば、学校の宿題である。宿題は子どもが自分でやるべきも

のだ。やってなければ先生に叱られるのである。それも必要な経験である。叱られた上で、この次からしっかりやっていこうと考えるか、人のノートを写してしまおうと考えるかは別として、その子なりに次の行動にうつれるであろう。

それを親がやってやる。そして先生の手前をつくらう、といっても親がやってやれる期間はそう長くはない。学校でやることはどんどんむづかしくなるから小学校の高学年になればもうお手上げである。

そこで家庭教師をやとう、その家庭教師が、子どもに自分で考える行き方を教えてくれるならまだいい。こういう親が、家庭教師に求めるのは、そうではない。子どもの宿題を代りにやってくれ、ということなのである。

かくして、子どもは、また、自らは何もすることなく、何も身につけることなく、すんでいく。しかし、学年は進むから、しなければならぬはずのことは増えていく。しかし、自分のものになっていることは少ない。実質的なギャップは拡がっていくわけである。

そして、ある時、ついに全く行けなくなってしまう。

もちろんいろいろなバリエーションがある。ある時期までは優等生であったという例もある。そうであるが故に子どもが自分の

中に、かくあらねばならぬという理想像をつくりあげる。肥大した自我といってもよい。世間しらずの子が描いた自我像だからよく言えば純粹である。わるくいえば現実性がない、だからいつかは、現実にあわなくなる。そして登校できなくなる。

こういう親は極端に子どもに対して弱い、ある親は、子どもがテレビを見る時間が長すぎるので少なくてしようとした。それは結構なことであるがそのことを子どもと話し合うことができない。電気屋を呼んで目立たないようにこわしてくれと頼んだ。電気屋は、「わたしは修理してくれ」といわれたことはじめてだといつて笑ったという。

これではテレビを見ることはできなくなってもそれによって浮いた時間を何に使うかについて子どもは全く責任を負っていないわけである。

○
こういう親たちに接しながら考えることがある。

今、高校、中学の年頃の子どもをもっている世代は、昭和のはじめに少年期を送った人々である。そのころは戦争のつづいた時

代であった。今からいえば軍国主義と批判される時代であったが、社会的な価値観は一定の方向にあった。それが今は非常に多様化している。だから将来どういう子に育てようかということをひとりひとりの親が考えなければならぬ。たまに文部省が「期待される人間像」を出せばよってたかかってたたいてしまう。ところが、このグループに出てくる親たちはそれが考えられない、ひたすら学校にたのみ、家庭教師にたのみ。

そして学校に行ってもらうために子どものご機嫌をとり、物を買い与える。ひどい例になると中学生の子にヨットからゴルフ道具まで買い与える。物を買ってもがまんする力が身につくわけではないから学校へ行けるはずがない。

子どもは登校を拒んでいるから親以外の大人に接することがない。その親が、子どもの顔色をうかがってヘイコラしているのだから自分の将来のモデルにならない。同一視が対象にならない。だからどうしていいかわからなくなる。

○
さて本論に入って、幼児教育の一ばん大切なことは、子どもを

大切に育てるということは、子どもが自分で身につけなければならないことを親がかわってやってやることと混同しないことだと思ふ。自分で覚えるべきことは覚えさせなければならないのである。

では幼児期の終りまでに子どもが自分でできるようになるべきことは何であろうか。

順調な発達をしている子なら次の三つのことではないだろうか。

一つは、話し言葉のひとつとりの完成である。もっと具体的にいえば、日本語なら日本語の中で使われる音が、ひとつとりの発音できるようになること、超特急を、トーチョコキューというように発音の倒置がなくなること、犬のことをワンワン、自動車のことをブーブーというようにない方がなくなること等を意味している。もちろん、人のいうことも理解できることもふくまれていてる。

文字の方は通常ならそのあとである。ただし、テレビの普及などで読める時期が昔より早くなっていることは事実である。

とくに日本語では、カナという大変便利な文字があるから特に文字を教えこむことを急ぐ傾向がある。本来学校に入ってから覚えることをそれ以前にやろうとする。

だがこれは注意を要する。平がな、カタカナとABCを比べてみればわかる。どちらも表音文字である。だが、違った点がある。かなは、話したとおりに書けば文章になるが、ABCはそうはいかない。文字のスペルを覚えなければ文章は書けない。

ところで、会話というものは、文章としてみた場合、非常に不完全なものである。半ばは相手の言葉に依存しているし、身振りや表情で補っている。だから、AB二人の会話を記録して、Aの方だけ消してしまったら、Bの話していることはまことに不完全な文章になる。まして、日本語は主語を略してしまうからなおさらである。

だから、本来ならいきなり書く作文ではなく、口頭の作文とでもいべき、つまり、文章体として完全なものを言わせてみる、という段階があつてよいはずである。ところがそれをやらないでいきなり書かせる傾向があつてい。

話し言葉の中では、「ほくは、けき七時におきて、顔を洗つて、ごはんを食べてから、学校に出かけました」などは決していわないのに書かせようとするのである。

二つ目は、身近の生活習慣の自立ということである。食べる、眠る、衣服の着脱、排便、保健衛生などの日常生活に必要な習慣

がひとりであるように、ということである。

こういうことは、大人が、ケガでもして食事もトイレに行くことも人手を借りなければならなくなったときを思い浮かべればよくわかる。その期間中、入院するかして、社会生活からリタイヤしなければならぬであろう。

もちろんひとつひとつの習慣によって自立する時期に違いがある。昭和十年代に山下俊郎氏が、生活習慣自立の水準というものをつくった。数年前にある人が、現代の子どもにやってみたところ、あまり変らなかつたという。ただ、着物を着るのが早くなつて来た。これは、楽に着られる着物が多くなつたからということが理由らしい。たしかに、昔は、ひっぱりあげて放せばそれだけで、などというズボンはなかつた。

もっとも、あまり便利になりすぎて、かえつてできなくなつたことも最近では増えてきている。小刀で鉛筆をけずれる子は最近では少ないのではないだろうか。ぞうきんのしぼり方のわからない子も実際にいたということである。今に、ひもの結べない子、自動でないドアの前では黙つて立っている子などが出てくるかも知れない。

あるところでは、一回だけ接した子であるが、母親が、面倒だというので、天気の良い日にもゴム長をはかせている子がいた。こ

の子は脱ぎとばすことはできたが、脱いだくつを揃えることはできなかつた。

三つ目に大切なことは、課題意識の成立ということである。こういう言い方をするとむづかしいが、要するに、嫌なことでもしなければいけないことはする、好きなことでもしていけない時間にはしない、といった心構えが成立することである。仕事とあそびの分化といつてもよいかもしれない。

はじめに述べた登行拒否児などはこの意識の非常に弱い子である。トランスの低い子といつてもよい。

四月のはじめの幼稚園では、どこでも大てい、嫌がつて泣く子がひとりやふたりはいるものである。

そのとき、どうしても行かせるといふ姿勢を親がもつていと、しばらくすると大ていの子どもは、子ども同士のあそびの中に入れるようになり、やがてその方が面白くなっていく。

それを、かわいそうだ、かわいそうだ、親がいつまでもつきそつていたり、極端な場合は止めてしまつたりする。義務教育ではないから、止めてしまうのは自由だけれども、それは問題を表面化させないだけの話である。元気に通園している子はどんどん社会性を身につけていくからその差は、ひろがるばかりである。

「論」というに値するかどうかわからないが、最近の傾向でわたくしが気になっていることを最後に述べておこう。

それは母と子の結びつきが弱くなり、人間の声が、生の人間からでなく、機械から聞えてくるが多くなったことである。

母親が母乳を飲ませることが少なくなったから昔のような、いわゆる乳臭い赤ちゃんが減ったような気がする。おむつの洗たくもする人が少なくなった。子どもの便をみるというのは健康状態を知る大切な手がかりなのだが貸しおむつの人たちは不安はないのだろうか。

子守り歌もテープから聞えてくる。おとぎ話のテープもある。

こういう傾向がつけば、母と子の結びつきは弱くなるのではないだろうか。子守り歌は何も名曲である必要はない。母親のひざで、あるいは背で、本物の母親の声を聞いてこそいいみがあるのである。

最近はまだ、背中にオンブするのに、うしろ向きに腰かけさせる道具ができた。背中にひもでくくりつけるのは足の発達にわる

い、とでもいう発想から出たものであるが、わたくしはあのころから親子が背を向けあって暮すことにはないと思う。

もうひとつは、核家族が進んで、母親がアドバイザーをもたなくなることである。だから育児書にたよるほかない。それも大部のものをていねいに読んでくれればよい。発達には個人差があり、あることができるようになる時期にも早いおそいがあることが書いてあるからである。

それを、婦人雑誌の付録のようなものを読んだり、テレビのコマギレの五分の番組をみたりする。そうすると平均の平均のことしか書いてない。だから、何か月の赤ちゃんは何CCのミルクを飲ませなければいけない、といった焦りになってくる。

ホンのちよっとしたこと、児童相談所に電話をかけてくる例が最近が多いということである。

生れて二か月の子に、テレビで見た赤ちゃん体操をやって骨を折ったという記事をみたことがある。年齢をまちがえて、この赤ちゃんには到底無理な運動をさせた結果であるという。

コマギレのテレビ番組をみるからおこなうことである。育児書しか頼るものがないにしても、せめて、ていねいに順序を追ってよんであればこういうことは起らないであろう。

(国立特殊教育総合研究所)